

【ねがいはましては】

令和5年7月30日

KYOWA SCHOOL

第394号

「狂った歯車」

令和5年7月29日付の読売新聞に『「〇〇〇〇」で離職の教員最多』の見出しがありました。〇〇〇〇の部分は「精神疾患」になります。2021年度、953人、2009年度の調査からすると、約1.6倍にあたるそうです。

教員試験を乗り越え、子どもたちとの楽しい生活に夢を抱きながら就いた職場で何があったのか。お一人おひとりの先生方の胸中を察すると、私はその痛みには耐えられず顔を閉じ奥歯をかみしめるばかりです。

文科省の分析では「教員の業務量が増え、さらに業務内容が高度化し、対応が難しくなっているのでは」としているそうです。

子どもたちの笑顔に包まれながら、子どもたちの笑顔に救われながら、子どもたちの笑顔に勇気をもらいながら生活するはずであった「先生という夢」は見事に塵となってどこかへと消えていったのです。

精神疾患という固有名詞がつくからには、正式な医師の診断があることになります。離職という形になっての953人ですが、このラインすれすれで懸命に頑張っておられる先生方は相当数いらっしゃるのではないのでしょうか。

これに並行するようにユニセフによる子どもの幸福度調査からは、身体的健康は38ヶ国中第1位、であるにもかかわらず、精神的幸福度は37位となっています。先生も子どもたちもボロボロなのです。

何がそうさせているのか、緊急に文科省は原因を究明し、対応を迫られるはずですが。文科省というトップは、はたして先生方や子どもたちに添っていると言えるのでしょうか。政府は「子ども家庭庁」という新組織を作っていますが、はたして文科省はいったい何なのか・・・子どもがまん中ではないのですか。

子どもたちの感じる幸福度はどこから来ているのか、子どもの一日をたどってみると、そのほとんどが学校という場で過ごしていることになります。今やご両親が仕事についていることがあたりまえに近い状態の中、子どもが自分以外の人と触れ合う時間をたどってみると、50年前からする大きな変化が見受けられます。

50年前、学校は朝8時前後から午後3時～4時前後まで、帰宅するとすかさず近所の子どもたちはそれぞれに呼び合って「遊び」・・・やがて各家庭で夕餉の準備が整ったころ、子はそれぞれが帰宅し夕食、団らん。2～3世代そろっての夕ご飯があり、そのなかで会話があり、各家庭ではそれぞれに情報交換が行われていました。家族間の会話は子にとって精神安定にはかかせない時間だったはずですが。

現在、かなりの家庭で夕餉を一緒にとることは難しいことになっているのかもしれませんが。とくに夕餉を作っているときの「香り」「匂い」には格別の魅力があったように感じます。おとなりでは「カレーライス」、前のお宅からは「煮物」、はたまた秋になると、どこからも「サンマを焼く匂い」だったような・・・子どもたちはその匂いに誘われるように帰ったように記憶しています。

遊び疲れて、おなかがへって、目の前に広がるお母さん自慢の料理・・・子は安心真ただ中へと入っていきます。

子にとってのしあわせの一番は、食べることだと思います。育ちたい、大きくなりたいと、からだはごくごく自然に要求してきます。その夕方の時間は、今や完全に姿を変えてしまったように感じます。

さて、教員の方々に課せられた義務、それは「教育」でしょう。当然です。しかしながら、今や益々子どもたちへの「教育」は、「成績」へと完全に变身しているように感じます。先生方は、子どもたちに学ぶことの楽しさや魅力を伝えようと教材づくりや授業づくりに懸命に努力されています。しかし、とどのつまりは「成績」へとシフトを変えなければならない強制が待ち受けています。それがご両親方の「成績欲」です。社会が「成果主義」である以上、すべて「数字」が重要になります。「合っていればよい」という結果主義へと引きずられていきます。各クラスでテストの平均点が出され、評価され、悪ければあっちからこっちからバッシングの嵐が待ち受けています。

子どもたちの将来は、企業戦士です。そのように文科省の指導要領の変遷を眺めると感じることができます。50年前、高度経済成長期には、教科書内は圧倒的な量で占められ、そこから発生した「学校崩壊」は、「ゆとり教育」へと変化、しかしその後、世界的な学力調査で低下が認められると、すかさず量増加へ転じ、ここ数年では英語力強化、プログラミング教育など、世界レベルでの経済戦争の敗者にならないための教育へと変化しつつあります。

客観的にみると、子どもたちは世界経済戦争へ立ち向かうことの出来る戦士教育をうけているように見えます。

「豊かさとは」と問われた時、どの国もGDP世界上位を目指すことだと思っっているようですが、現実、日本は上位にいながらも、子どもたちは自分たちを「不幸」だと感じています。

「～させられる」という受け身のみの教育、「どうしよう」という不安だけの学校から、「～してみたい」という間違えや失敗に動じない「生きようとする力」を育むことこそが、学校の使命であるはずですが。

先生方、精神疾患を患ったことはけっしてあなた方が弱いからではありません。あなた方が「子ども」を正面から心配していることの証です。子どもたちよ、そんな先生方を救ってあげようではありませんか。君たちの小さな勇気の一つひとつの積み重ねが、「本当の本物の学校」をつくりあげます。「逃げないで・・・」